

# 1707年宝永地震における志摩国鳥羽の津波浸水域について —新発見の『志州鳥羽城絵図』を用いた分析から—

三重県立津高等技術学校\* 盆野 行輝

The Tsunami inundation Area of Toba in Shima Province during the 1707 Hōei Earthquake  
— An Analysis using the newly discovered “Shi-shu Toba jou ezu”, a map of Toba Castle in Shima Province —

Yukiteru BONNO

Tsu Advanced Vocational Training School of Mie Prefecture,  
1176-2, Takajayakomoricho, Tsu, Mie, 514-0817 Japan

The 1707 Hōei Earthquake is well-known to have caused tsunami damage in Toba, Shima Province, which is now Toba City, Mie Prefecture, Japan. In particular, Toba Castle and its castle town were severely damaged by the tsunami, and samurai residences in the castle were inundated. In this study, we used a newly discovered old map to clarify who was living where at the time of the earthquake. We then estimated the locations of the damaged houses in and around Toba Castle based on the information on the damaged people recorded in historical records. Furthermore, it showed that the height of the tsunami in Toba could have been about 8 meters.

Keywords: the 1707 Hōei Earthquake, Tsunami inundation area, Toba Castle and Toba castle town, Historical documents, Newly discovered old map.

## §1. はじめに

志摩国鳥羽は、宝永四年(1707)の宝永地震、嘉永七年(1854)の安政東海地震の二度の南海トラフ地震に伴う津波により大きな被害に見舞われたことが知られる。安政東海地震による鳥羽の被害については、幕末であったこともあり、鳥羽城内や城下で地震に遭遇した人々の日記等、同時代史料が比較的多く残されるのに対して、宝永地震による被害に関しては史料に乏しく、確かな史料としては、僅かに徳川五代将軍綱吉の側用人であった柳沢吉保の公用日記『楽只堂年録』(柳沢文庫蔵、東京大学地震研究所、1983)と、地震発生当時の鳥羽城主・松平乗邑家中の記録書『松平乗邑家中日記覚』(名古屋大学附属図書館蔵)が残される。このほかは地震から10年を経た後に間接的に被害を記した史料が残されるのみで、津波被害について、これら史料からその様相を類推するしか手立てがなかった。

盆野(2016)は、これら史料を用いて、宝永地震における城郭を中心とした鳥羽の津波被害の様相について考察し、津波により櫓や侍屋敷が流出するなど鳥羽城が直接被害を受けたこと、地震により地盤沈下が発生しその影響が10年以上に亘って続いたこと、津波高が場所により7mを超える可能性があることを指摘した。一方で、津波浸水域については、限られた史料であるため考察には至らなかった。先行研究に

おいても、羽鳥(1978)などの研究を経て行谷・都司(2005)が詳細な現地調査のうえ三重県沿岸の津波浸水高を評価するが、志摩国鳥羽城下においては、宝永地震についてはデータがなく、安政東海地震についてもわずかに2箇所で3.7 mないし4.8 mとの推定値を示すのみで、津波浸水域には言及していない。

しかしながら、今般、松平乗邑在城時の鳥羽城内とその城下を詳細に描いた絵図が発見され、これまで不明であった地震時の鳥羽城内、城下の侍屋敷の位置や区割りなどが高い精度で把握できたことから、津波浸水域の考察に必要な当時の位置情報を得ることができることとなった。

本稿では、当該絵図と前出の史料を用いて、宝永地震における鳥羽城内外の津波被害を検証のうえ、津波浸水域について考察し、宝永地震の具体像の一端を明らかにしたい。

## §2. 津波被害を記録する史料

宝永地震による志摩国鳥羽の津波被害を記録する史料については、盆野(2016)で既に引用、検討したが、新たな考察のため、あらためて提示する。

### 2.1 『楽只堂年録』に記録された津波被害

『楽只堂年録』は、徳川五代将軍綱吉の側用人を務め、綱吉の信任を得て一介の藩士から幕府大老格まで上り詰めた柳沢吉保の公用日記であり、吉保に

\* 〒514-0817 三重県津市高茶屋小森町 1176-2  
電子メール: bonnoy00@pref.mie.lg.jp

至るまでの柳沢家の系譜と宝永六年(1709)に嫡男吉里に家督を譲り隠居するまでの吉保治績を記録している。当時の幕政中枢の動静や幕臣、一族の動向のほか、元禄十六年(1703)の元禄地震や宝永四年(1707)の宝永地震、宝永富士山噴火など当時頻発した災害にかかる各地の被害を伝える。

宝永地震に伴う志摩国鳥羽の被害については、城主・松平乗邑から幕府への報告が次のように記録される。

志州鳥羽領地震高潮ニ而破損之覚

- 一 櫓五ヶ所
    - 内 三ヶ所崩
    - 二ヶ所大破
  - 一 塀崩千四百五拾間
  - 一 石垣崩八百三拾間
  - 一 門拾二ヶ所
    - 内 六ヶ所崩
    - 六ヶ所大破
  - 一 橋流壱ヶ所
  - 一 土蔵崩十二ヶ所
    - 内 壱ヶ所米蔵
  - 一 城内侍屋舗三拾九軒
    - 内 廿五軒潰
    - 十四軒流
  - 一 溺死人十四人
    - 内 七人男
    - 七人女
  - 一 町屋五拾七軒
    - 内 廿四軒潰
    - 三拾三軒流
  - 一 同溺死六人
    - 内 三人男
    - 三人女
  - 一 溺死馬 四疋
  - 一 城内町屋共ニ怪我人無御座候
- 右之通御座候、本丸居宅共別条無御座候、地震ニ而破損有之候得共少之儀ニ御座候、領分中損亡破損等之儀委細未相知不申候
- 十月

松平和泉守

この記録からは、地震の揺れによる被害と津波被害の峻別が出来ないが、橋1ヶ所が流失したほか、城内侍屋敷の被害39軒のうち14軒が流失、町屋も被害57軒、うち33軒が流失とし、津波被害の大きさを窺わせる。

2.2 『松平乗邑家中日記覚』に記録された津波被害

一方、『松平乗邑家中日記覚』は、地震当日の宝永四年十月四日(1707年10月28日)の記録として「未

上刻、大地震二ノ御丸瓦落申候、同日申ノ上刻、高波上り二ノ御丸口式墓江潮上り、中之口ハ敷墓之際まで潮上り、御城内侍屋敷岩崎侍屋敷不残水破之事」とし、津波が城内まで遡上したことや津波によって城内の侍屋敷が全て被害にあったことを伝えている。

なお、鳥羽城は、ひな壇上に配置された本丸、二之丸、三之丸の内郭とそれを取り巻く外曲輪(惣曲輪)、かつて伊勢国・志摩国の国境であった妙慶川を挟んで北側の山沿いに連なる帯曲輪(岩崎郭)の大きく3つの区画から構成される城で、本史料が伝えるのは、城の内郭を取り巻く外曲輪と帯曲輪に配された侍屋敷がことごとく津波被害を受けたということである。

また、地震翌年の宝永五年二月二十七日(1708年4月17日)の条には、「水難ニ遭候者左之通御用捨」として、津波被災者であると考えられる75人の家臣名が記されている。被災の程度や内容、「御用捨」の中身は不明であるが、何らかの負担を免除しなければならぬほどの被害が家中にあったことを窺わせる。

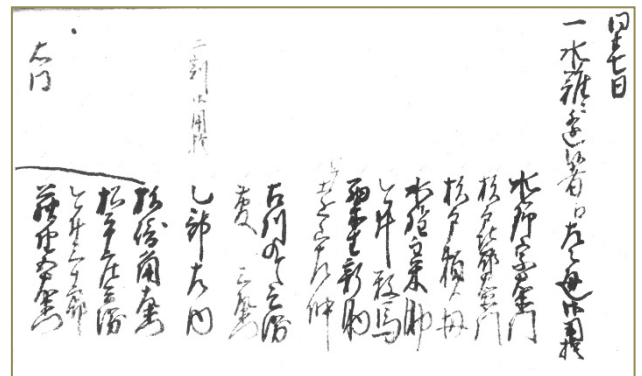


図1 『松平乗邑家中日記覚』宝永五年二月二十七日条(名古屋大学附属図書館蔵)。

Fig. 1 Description of 27th day of 2nd month of the Hoei 5th year in "Matsudaira Norisato kachu nikki oboe", diary of Matsudaira Norisato family(owned by Nagoya University Library).

なお、本史料については、盆野(2016)においても引用したところであるが、引用に当たり、本史料を「宝永五年二月十七日(1708年4月7日)の条」とした。正しくは前記のとおり「宝永五年二月二十七日(1708年4月17日)の条」であり、本稿をもって訂正したい。

2.3 絵図に記録された津波被害

前出の文字史料のほか、宝永地震による津波被害を物語る絵図が残されている。

三重県総合博物館が所蔵する『鳥羽城之絵図』(図2)は180cm×200cmとほぼ畳2畳分の大型の彩色絵図で、城郭内のほか城下の様子を詳細に描いている。城郭内は石垣、土塀、櫓、門などの主要な構造物が克明に描かれているほか、石垣高や城内経路、要所間の距離など重要な軍事情報も詳細に記されている。また、城内の侍屋敷については一軒ごとに区画

され、一部はその居住者の氏名が記されている。年紀は無いが、侍屋敷に記載されている「板倉杢右衛門」、「大石三右衛門」等の人名から判断して、松平家移封後の板倉近江守重治が藩主であった宝永七年(1710)～享保三年(1718)の間に作成された絵図であると推定される。



図2 『鳥羽城之絵図』(三重県総合博物館蔵).  
※方位記号を加筆.

Fig. 2 “Toba jou no ezu”, illustrated map of Toba Castle.(owned by Mie Prefectural Museum).  
Azimuth symbol is added.



図3 図2の『鳥羽城之絵図』(三重県総合博物館蔵)の妙慶川付近の拡大図.  
※方位記号を加筆.

Fig. 3 A magnified view of Myoukei River area in “Toba jou no ezu” in Fig. 2(owned by Mie Prefectural Museum).  
Azimuth symbol is added.

この絵図には、外曲輪の隅に描かれた櫓3ヶ所に「此櫓流失」と特記されているほか、外曲輪・帯曲輪内侍屋敷の広範囲で「流失屋敷」と記された区画が点在している(図3)。盆野(2016)で指摘したとおり、

作成時期、「記載内容から、宝永地震による津波浸水の範囲、その被害規模の一端を指し示すと共に、地震後しばらくは津波被害から復興していなかったことを示している。

なお、これもすでに指摘済みであるが、板倉重治が、享保三年(1718)に松平(戸田)光慈と入れ替わりで山城国・淀へ移封される際に老中に提出した届出(『戸田家文書「譜局叢書」』, 三重県, 2003)には、津波により流出した櫓について「志州鳥羽城櫓三ヶ所、宝永四亥年津波高潮之節流失仕候由、于今其儘ニ而差置申候」と津波被害にあった櫓が復興されておらず、侍屋敷についても「今以折々潮入候儀御座候ニ付家作不仕候」と、地震から10年を経た後も、引き続き海水の流入があり復興されていないことが分かる。

### §3. 新たな鳥羽城絵図の発見

前章の史料から、津波による浸水被害が広範囲に亘ったことが推測されるが、その範囲の特定は、地震前の城内外の侍屋敷や施設の位置情報が限られていることや具体的な津波による流出箇所等の記録が限られていることから困難であった。そうした中、今般、『志州鳥羽城絵図』(個人蔵:西尾市寄託資料)(図4)と題された彩色絵図が発見された。

#### 3.1 絵図の概要

この絵図は、松平乗邑に連なる大給松平家で普請奉行を務めていたことが知られる榊原四郎兵衛家の子孫宅より2019年1月に発見され、愛知県西尾市教育委員会に寄託されたものである。大きさは、縦110.7cm、横123cmで、鳥羽城内とその城下を描き、武家地は水色、町屋は薄紅色で彩色し区分するほか、区画ごとに、武家地は屋敷名等を、町屋は町名と軒数を記載している。管見の限り、鳥羽城絵図としては最も詳細で精度の高い絵図であると言える。内容や来歴から、本絵図は松平乗邑在城時の鳥羽城及び城下を描いたものであることは明らかで、当時の城内、城下の位置情報が詳細に分かる。なお、前記の子孫宅からは、大給松平家の居城であった淀城と西尾城の絵図も同時に発見されており、いずれも『志州鳥羽城絵図』と同様に彩色で武家地と町屋を描き分け、武家地には区画ごとに屋敷名を記載することや、城の維持管理を担当する普請奉行の子孫宅から発見されたことから、城郭内外の管理のため作成された藩用絵図と考えられる。

なお、武家地の区画は、城内の外曲輪、帯曲輪で56区画、城外で84区画の合計140区画。うち屋敷名、施設名等が記載される区画は、それぞれ54区画、69区画、合計123区画で、全武家地の88%の区画で屋敷名等を知ることが出来る。なお、このうち14区画は「作事小屋」、「評定所」等藩用の施設で、残りの109区画に居住者の氏名が記載されている。また、絵図からは絵図作成当時の町数は「本町」、「大里町」、

「横町」,「中之郷町」,「藤之郷町」の5町で町屋数は684軒, 町別には「本町」167軒,「大里町」147軒,「横

町」113軒,「中之郷町」141軒,「藤之郷町」116軒であったことが分かる。

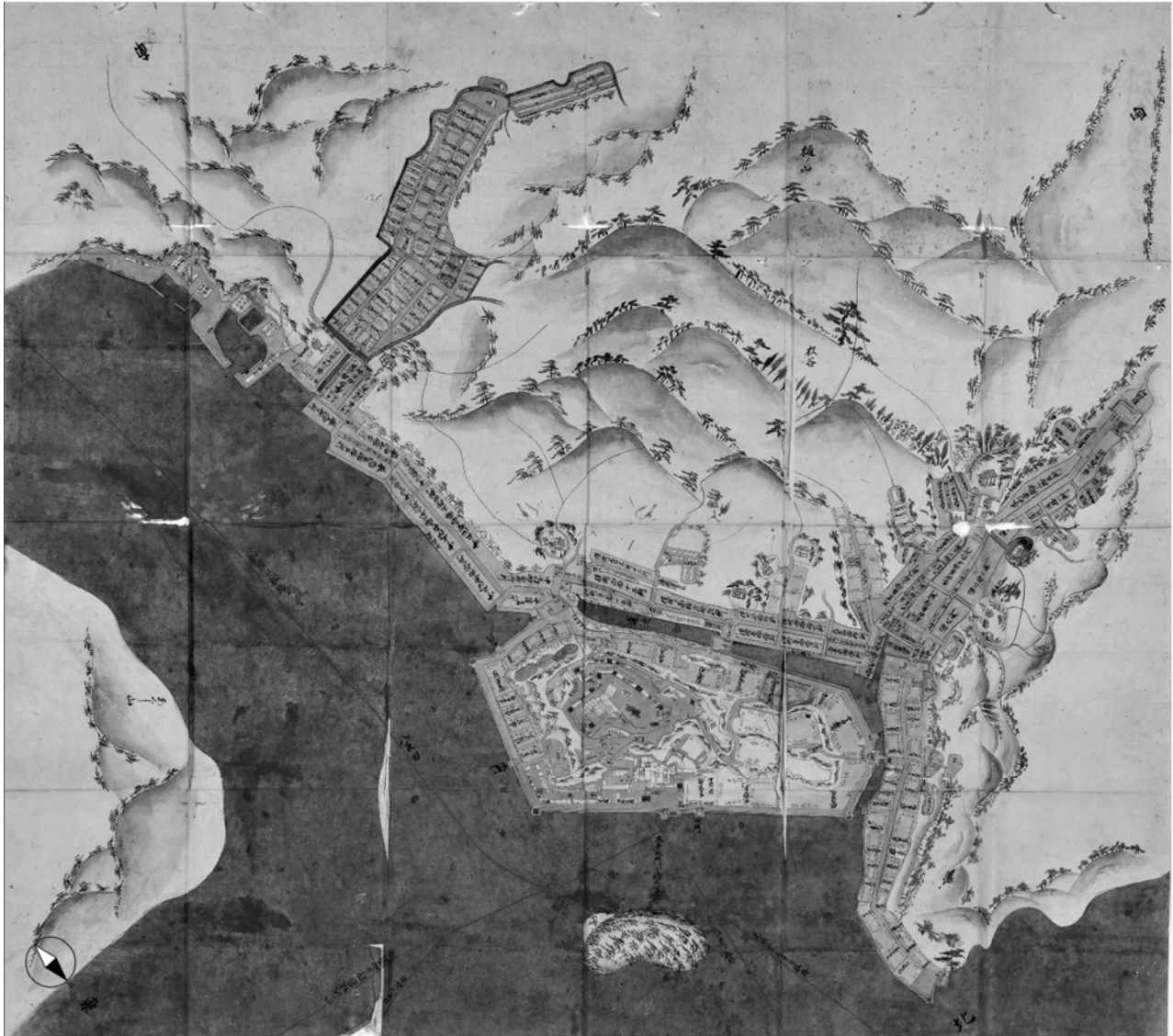


図4 『志州鳥羽城絵図』(個人蔵:西尾市寄託資料).

※方位記号を加筆. 本図のカラー版は口絵4参照.

Fig. 4 “Shi-shu Toba jou ezu” Illustrated map of Toba Castle in Shima Province(private collection, deposited to Nishio City, Aichi Prefecture).

Azimuth symbol is added. See Frontispiece 4 for the color version.

### 3.2 絵図の作成時期

では, 絵図が描く鳥羽城内外の様子はいつのものか. 絵図の記載内容から絵図の作成時期を検討する.

まず, 当絵図が松平乗邑の在城時のものであることから, 絵図の作成時期は, 『内閣文庫蔵 諸侯年表』[児玉・新田(1984)]より, 松平乗邑が鳥羽に入封した元禄四年(1691)二月から, その後伊勢国亀山に移封された宝永七年(1710)正月の間に作成されたものであることは間違いがない. では, もう少し時期を絞り込むことは出来ないであろうか. 絵図に記載された屋敷名のうち, 帯曲輪に名前の見られる「伊織様」, 「今

井数馬」, 「杉浦弥野右衛門」に着目したい(図5).

「伊織様」は, 『大給松平家家譜下書』(西尾市教育委員会, 2011a)によれば, 大給松平家宗家第8代で唐津藩主であった松平乗久の子, 松平乗清のことで, 宝永地震の際に鳥羽藩主であった松平乗邑の叔父にあたる人物である. 藩主の係累として特別に扱われたと考えられ, 絵図からは, 城郭内の外曲輪に広大な屋敷地を与えられていることが分かる. 同書によれば「伊織様」は「宝永四丁亥年二月四日四十八而病死」とあり, 宝永四年二月に死去したことが分かる. このことから, 作成時期の下限は宝永四年(1707)二

月ということになる。

一方で、「今井数馬」は、代々大給松平家で家老を務めた今井家当主の通称で、歴代「数馬」を襲名したが、『西尾藩家老・今井家由緒書』(西尾市教育委員会, 2011b)を見ると、時期により「数馬」の使用に空白があることが分かる。同書から通称の変遷を検証し、検討を試みたい。

「今井数馬」という通称の変遷を見ると、今井家4代目・今井数馬定光が元禄八年(1695)九月に病死した後、その跡を継いだ5代目・加兵衛定寛は、元禄十五年(1703)に死去するまで「加兵衛」と名乗っており、「数馬」を名乗った形跡がない。その跡を継いだ6代目・加兵衛定静は養子で、後に数馬を名乗るも、幼名は「巳之助」。家督相続時には幼少であったため、相続後の宝永二年(1705)十一月に14歳で元服している。ついては、それまでは幼名の「巳之助」を名乗っていたはずで、元禄八年九月から宝永二年十月ま

では「数馬」の空白期間と考えられる。

こうしたことから、「数馬」名義の屋敷が記載された本絵図は、①「元禄四年(1691)二月から元禄八年(1695)九月まで」の間、②「宝永二年(1705)十一月から宝永四年(1707)二月まで」の間ということになる。

さらに、帯曲輪にその氏名が見られる「杉浦弥野右衛門」は、西尾市資料叢書三『西尾藩御役人両奉行系』(西尾市教育委員会, 2007a)によれば、「大目付」の項に、「部屋住定府 元禄十丑九月十一日 従大納戸 八丁堀御屋敷詰又左衛門跡役彼仰付之」とあり、元禄十年九月からは定府「八丁堀御屋敷詰」で江戸に在住しており、「宝永四亥九月廿五日 転物頭鳥羽江引越」とあるように、地震直前の宝永四年九月まで鳥羽にいなかったことが分かる。

これらのことから、絵図の作成時期は①に絞られ、元禄四年二月から元禄八年九月までの約5年間であると考えられる。

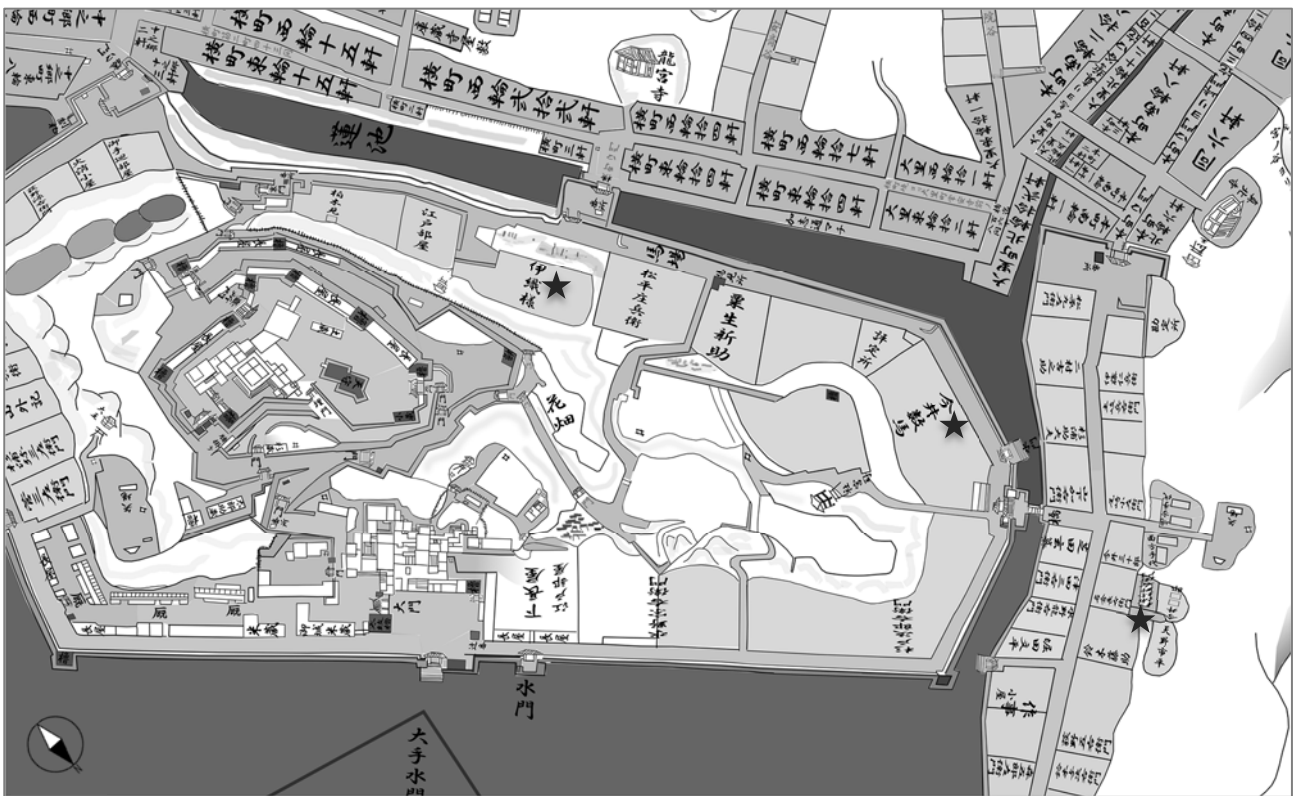


図5 図4の『志州鳥羽城絵図』の外曲輪部分について筆者にてトレースした図。

※図中の★印は本文中の「伊織様」、「今井数馬」、「杉浦弥野右衛門」屋敷地を示す。

Fig. 5 The author's tracing of “Sotoguruwa” area in Toba Castle in “Shi-shu Toba jou ezu” shown in Fig. 4. Asterisks in the figure indicate the residences of “Iori-sama”, “Imai Kazuma”, and “Sugiura Yanoemon” in the text.

### 3.3 絵図作成時から宝永地震までの屋敷替え

本絵図の作成時期が元禄四年二月から元禄八年九月までの間に絞り込まれたことから、本絵図が描く城内の姿は、宝永地震により被害を受ける前の姿であることが言える。地震から10年以上も前

の姿であることから、地震時には大きく変化している可能性がある。殊に、屋敷地については、当主の死去に伴う代替わりや、役職の異動に伴う屋敷地の変更や定府として江戸への転居などにより、少なからず変化していることが考えられる。ただし、頻繁

に転封が繰り返された譜代藩の大給松平家においては、度重なる屋敷替えは家臣の負担になることから、屋敷替えは必要最小限に留まったのではないかと推測する。なお、松平乗邑が鳥羽に在城した元禄四年(1691)から宝永地震の発生した宝永四年(1707)十一月までの間に、役替えにより定府となった者、または定府を解かれて鳥羽へ転居した者の氏名を『西尾藩御役人両奉行系』で見たとく、新たに定府となった者6名、定府を解かれた者10名、定府となったものの期間中に定府を解かれた者1名であり、屋敷替えは限定的であったと考えられる。

そうしたことから、本絵図が描く鳥羽城内外の様相は宝永地震直前の様相にほぼ近似と考えてよいのではないかと考える。また、現在の鳥羽の街は、多分に近世の街並み、道筋を踏襲しており、本絵図の地図情報と照合することが可能である。については、宝永地震の津波浸水域の検討にあたっての基礎資料とするため、本絵図のトレースを現在の地形図と重ね合わせ、地震前の鳥羽の街並みを再現したい。

#### § 4. 鳥羽城下の再現図

鳥羽城下の再現図の作成にあたって、まずは今般発見された『志州鳥羽城絵図』(図4)の写真画像をコンピューターに取り込み、図画ソフトを使用して絵図の描線をトレースした。次にこのトレース図上に、江戸時代からあり現在もその位置を変えずに存在する点や線を複数選び、その点・線を基準とし、地形図上の現在地が一致するようにトレースを回転、縮小、拡大などの作業を繰り返して重ね合わせた。ただし、現代と異なり測量技術に劣る近世絵図を基にしたトレース図と地形図との完全な一致は望むべくもなく、ズレや歪みが生じることから、最後は手作業での修正を加えた。なお、図重ね合わせの基準点・線は、具体的には鳥羽城外曲輪と帯曲輪を結ぶ相橋の橋台、鳥羽城を築城した九鬼氏菩提寺である城下の常安寺山門、鳥羽城本丸西面の石垣とした。これらの作業を経て地形図に『志州鳥羽城絵図』のトレース図を重ね合わせると、(図6)から(図8)のとおり地震前の鳥羽の道筋と街区を再現することができた。



図 6 鳥羽城下の再現図。  
 (三重県デジタル地図 1/5,000 に『志州鳥羽城絵図』(図 4)をもとに地名、街区等を加筆.)  
 ※図中の薄い網掛けは河川、海岸等水系、濃い網掛けは櫓を示す。

Fig. 6 Reproduction of the area around Toba Castle.

The names of places and streets in “Shi-shu Toba jou ezu” (Fig. 4) were added to the Mie Prefecture Digital Map 1:5,000.

The light shading in the figure indicates rivers and coasts, and the dark shading indicates turrets.

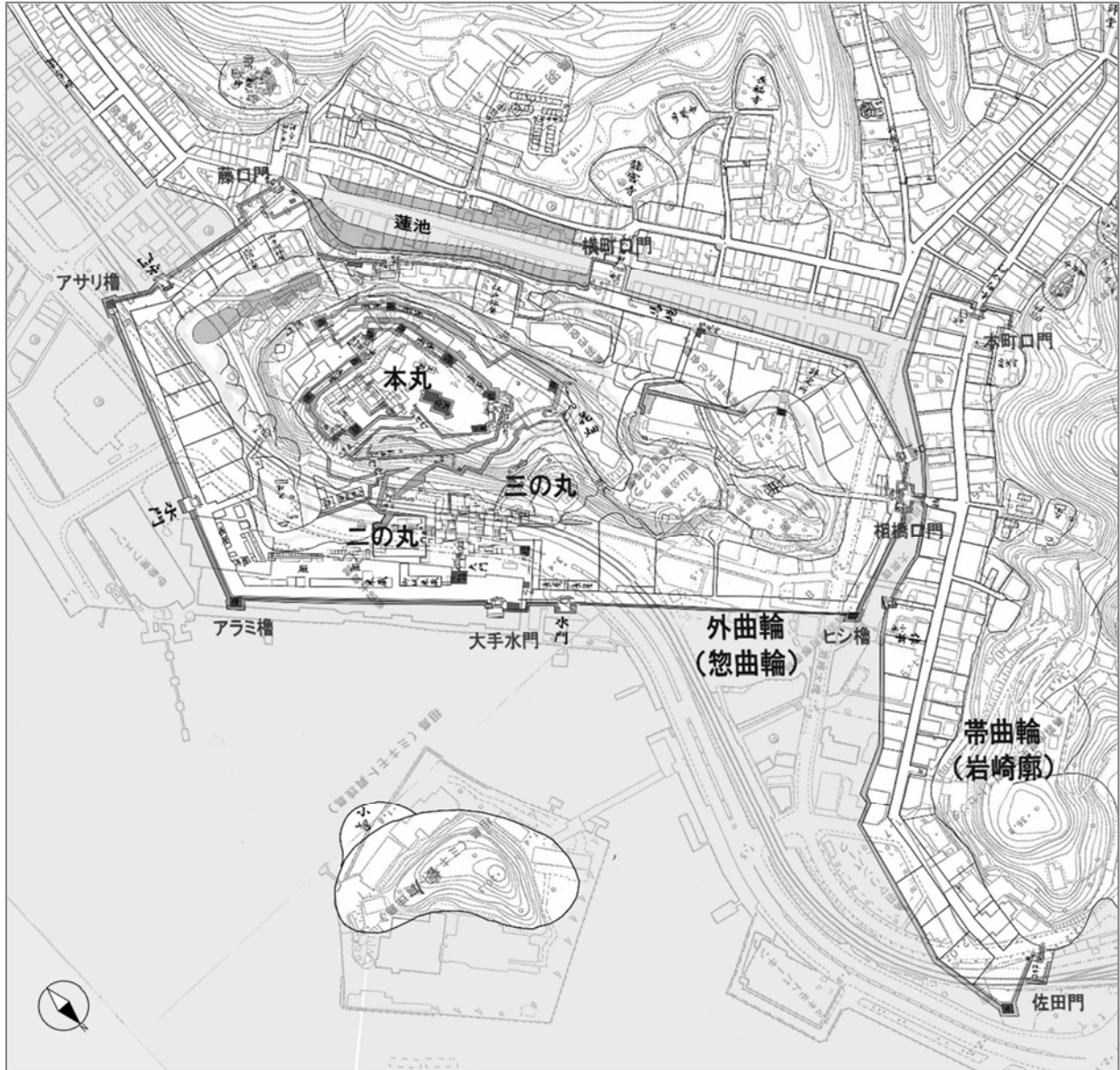


図 7 図 6 の鳥羽城下の再現図のうち城郭部分の拡大図。  
 (三重県デジタル地図 1/5,000 に『志州鳥羽城絵図』(図 4)をもとに加筆.)  
 ※図中の薄い網掛けは河川、海岸等水系、濃い網掛けは櫓を示す。

Fig. 7 A magnified view of the area around Toba Castle in the reproduction shown in Fig. 6.

The names of places and streets in “Shi-shu Toba jou ezu” (Fig. 4) were added to the Mie Prefecture Digital Map 1:5,000.

The light shading in the figure indicates rivers and coasts, and the dark shading indicates turrets.



図8 図6の鳥羽城下の再現図のうち城下・奥谷地区付近の拡大図。  
 (三重県デジタル地図 1/5,000 に『志州鳥羽城絵図』(図4)をもとに加筆.)  
 ※図中の薄い網掛けは河川、海岸等水系を示す。

Fig. 8 A magnified view of the area around the Okudani area outside the castle in the reproduction shown in Fig. 6.

The names of places and streets in “Shi-shu Toba jou ezu” (Fig. 4) were added to the Mie Prefecture Digital Map 1:5,000.

The light shading in the figure indicates rivers and coasts.

この地図を見ると、近代の開発等により沿岸部が拡張され大きく変化しているが、近世の道筋や街区はかなりの部分が旧状を留めていることが分かる。また、鳥羽の城下町が沿岸部の山に張り付くように連なる道筋の町と城外の狭い谷筋の町により形成されていることがよく分かる。さらには、谷筋に配された武家地は、道筋だけでなく、各屋敷地の区画も見事に旧状を今に留めていることが確認できる。

これにより宝永地震前の各屋敷地の位置をかなりの精度で、正確に特定することが可能である。

### §5. 屋敷名の整理

次に、絵図に記載された屋敷名等を整理したい。屋敷名等が記載された区画は前述のとおり、城内の外曲輪、帯曲輪では54区画、城外では69区画で、合計で123区画である。そのうち「評定所」や「作事小屋」など施設名を記載するものが14区画であることから、屋

敷名が記載され居住者が判明するものは、城内46区画、城外で63区画、合わせて109区画である。

これら区画の屋敷名について、その区画の所在により整理し、さらに前出の『松平乗邑家中日記覚』の宝永5年2月27日の条(図1)に「水難ニ遭候者」として記載された者の氏名と対比し、符合を確認する。その結果、その氏名が一致する者、または氏名からその者の別名と考えられる者あるいはその後嗣と考えられるものを抽出すると37名を数えることができる(表1)。

そこで、これら37名の屋敷の所在を先に現在の地形図に落とし込んだ城下図(図6)中に求めることとする。つまり、『松平乗邑日記覚』の記載から何らかの津波被害にあったと考えられる家中の人々の被害については、傷病等の人的被害も考えられるが、「御用捨」という経済的な負担の免除から、その主な被害は屋敷の流失、損壊という物的被害と考えられるので、その被害にあったと考えられる屋敷の位置を求める。



表1 『志州鳥羽城絵図』(図4)中の屋敷名等一覧。

Table. 1 The list of the name of samurai residences on the “Shi-shu Toba jou ezu”, a .Illustrated map of Toba Castle in Shima Province in Fig. 4..

No.	屋敷名	所在	『松平乗邑家中日記覚』の記載		No.	屋敷名	所在	『松平乗邑家中日記覚』の記載	
			記載の有無	備考				記載の有無	備考
1	松平庄兵衛	外曲輪	○		64	矢場・江戸組足輕	奥谷	—	
2	伊織様	外曲輪			65	高橋惣七	奥谷		
3	江戸部屋	外曲輪	—		66	荻野一平次	奥谷	△	荻野臺右衛門
4	柏木見口	外曲輪			67	梅津権兵衛	奥谷		
5	御手廻部や	外曲輪	—		68	井野三四郎	奥谷		
6	火消小屋	外曲輪	—		69	宇野勝之助	奥谷		
7	荻野孫右衛門	外曲輪	○		70	多崎彦左衛門	奥谷		
8	西尾清左衛門	外曲輪	○		71	山川新五右衛門	奥谷		
9	古川九郎兵衛	外曲輪	○		72	鈴木弥門	奥谷		
10	近藤春潭	外曲輪	○		73	和田庄作	奥谷		
11	勝権兵衛	外曲輪			74	近藤孫大夫	奥谷		
12	遠山外記	外曲輪	△	遠山左仲	75	鈴木与一郎	奥谷		
13	杉浦弥三左衛門	外曲輪			76	関又八郎	奥谷		
14	菅三左衛門	外曲輪	○		77	堀川藤七郎	奥谷		
15	水野宗右衛門	外曲輪	○		78	市川孫兵衛	奥谷		
16	杉戸次郎右衛門	外曲輪	○		79	向源兵衛	奥谷		
17	今井数馬	外曲輪	○		80	青木十三郎	奥谷		
18	評定所	外曲輪	—		81	相沢勘左衛門	奥谷		
19	粟生新助	外曲輪	○		82	河合才兵衛	奥谷		
20	松原九左衛門	帯曲輪	○		83	松平喜兵衛	奥谷	○	
21	二村吉之助	帯曲輪	△	二村吉兵衛	84	梅村何兵衛	奥谷		
22	杉浦助大夫	帯曲輪	○		85	鈴木七兵衛	奥谷		
23	山下加右衛門	帯曲輪			86	梅村七郎右衛門	奥谷		
24	芝田玄纂	帯曲輪			87	本郷仁右衛門	奥谷		
25	津田三右衛門	帯曲輪			88	古川武助	奥谷		
26	水野龍右衛門	帯曲輪			89	板倉三郎左衛門	奥谷		
27	堀田文平	帯曲輪	○		90	赤沢源之丞	奥谷		
28	作事小屋	帯曲輪	—		91	柴田権左衛門	奥谷		
29	森五郎左衛門	帯曲輪	○		92	榊原四郎兵衛	奥谷		
30	和田次右衛門	帯曲輪	△	和田治右衛門カ	93	相沢長左衛門	奥谷	○	
31	杉崎角左衛門	帯曲輪	○		94	尾嶋理左衛門	奥谷	○	
32	鈴木与右衛門	帯曲輪			95	山川次部右衛門	奥谷	△	山川治部右衛門カ
33	笠原九兵衛	帯曲輪	○		96	伊東武左衛門	奥谷		
34	乙部左内	帯曲輪	○		97	水野図書	奥谷		
35	勘定所	帯曲輪	—		98	浦井團次	奥谷		
36	伊藤仁兵衛	帯曲輪			99	杉浦正齋	奥谷		
37	土岐兵右衛門	帯曲輪	○		100	中嶋元右衛門	奥谷		
38	尾崎小左衛門	帯曲輪	○		101	川嶋源右衛門	奥谷		
39	今井三十郎	帯曲輪	○		102	菅沼一二左衛門	奥谷		
40	名倉長右衛門	帯曲輪	○		103	本田余小助	奥谷		
41	鈴木藤助	帯曲輪			104	大塚傳左衛門	奥谷		
42	荻野五右衛門	帯曲輪	○		105	柴田安左衛門	奥谷		
43	鈴木与次右衛門	帯曲輪	○		106	河合□□	奥谷		
44	岩崎権左衛門	帯曲輪	○		107	今井弥大夫	奥谷		
45	中村政右衛門	帯曲輪	○		108	割小屋	奥谷	—	
46	磯野勘左衛門	帯曲輪			109	鈴木勘右衛門	奥谷		
47	山田新兵衛	帯曲輪	○		110	小菅角兵衛	奥谷		
48	国府平大夫	帯曲輪	○		111	戸田兵蔵	奥谷		
49	水野太左衛門	帯曲輪	○		112	戸田甚兵衛	奥谷		
50	天野市平	帯曲輪			113	小嶋文右衛門	奥谷		
51	今井□□郎	帯曲輪			114	羽生宗徹	奥谷		
52	杉浦弥野右衛門	帯曲輪			115	山内宗閑	奥谷		
53	嶋方手代	帯曲輪	—		116	大塚新五郎	奥谷		
54	面方手代	帯曲輪	—		117	明屋敷	奥谷	—	
55	町同心	自益谷	—		118	尾嶋源太左衛門	奥谷		
56	中村平助	自益谷			119	田中理左衛門	奥谷		
57	秋山角兵衛	自益谷			120	羽生勝右衛門	奥谷		
58	青木兵次左衛門	自益谷			121	田代藤右衛門	奥谷		
59	近藤与次右衛門	自益谷			122	種村加左衛門	馬ノ谷		
60	柘植太兵衛	自益谷			123	□□□左衛門	馬ノ谷		
61	歩行目付	自益谷	—		※注:表中屋敷名欄の「○」は氏名が一致するもの、「△」は氏名は一致しないが他史料から同一人物又はその後嗣と考えられるもの、「—」は藩用施設のため居住者の記載ないもの				
62	割小屋	自益谷	—						
63	粟生傳左衛門	藤之郷	○						

## §6. 「水難二遭侯者」の居住地の範囲

(表1)の整理をもとに、『松平乗邑家中日記覚』(図1)に記される「水難二遭侯者」の屋敷地を城下図(図7)中に求め、その箇所をプロット(編みかけ)した。

### 6.1 城内侍屋敷

鳥羽の武家地のうち、城内である外曲輪、帯曲輪に「水難二遭侯者」の屋敷地を求める。さらに、これに三重県総合博物館蔵の『鳥羽城之絵図』(図2)に記載された「流失屋敷」等の書き込みのある区画を重ね合わせてみたい。すると、次の図9のとおりとなった。外曲輪、帯曲輪とも、「評定所」、「作事小屋」等の藩

用の施設のほか、絵図の作成時点から居住者の屋敷替えがあったと考えられ、一部の居住地に空白が見られるが、全体の傾向として外曲輪、帯曲輪ともかなりの部分が「水難二遭侯者」の居住地または流失屋敷で占められており、この結果は、『松平乗邑家中日記覚』が伝える「御城内侍屋敷岩崎侍屋敷不残水破之事」との記述とほぼ符合することとなった。

このことから、『松平乗邑家中日記覚』の「不残水破」とする城内侍屋敷の被害は必ずしも誇張ではなかったことを裏付ける結果となった。

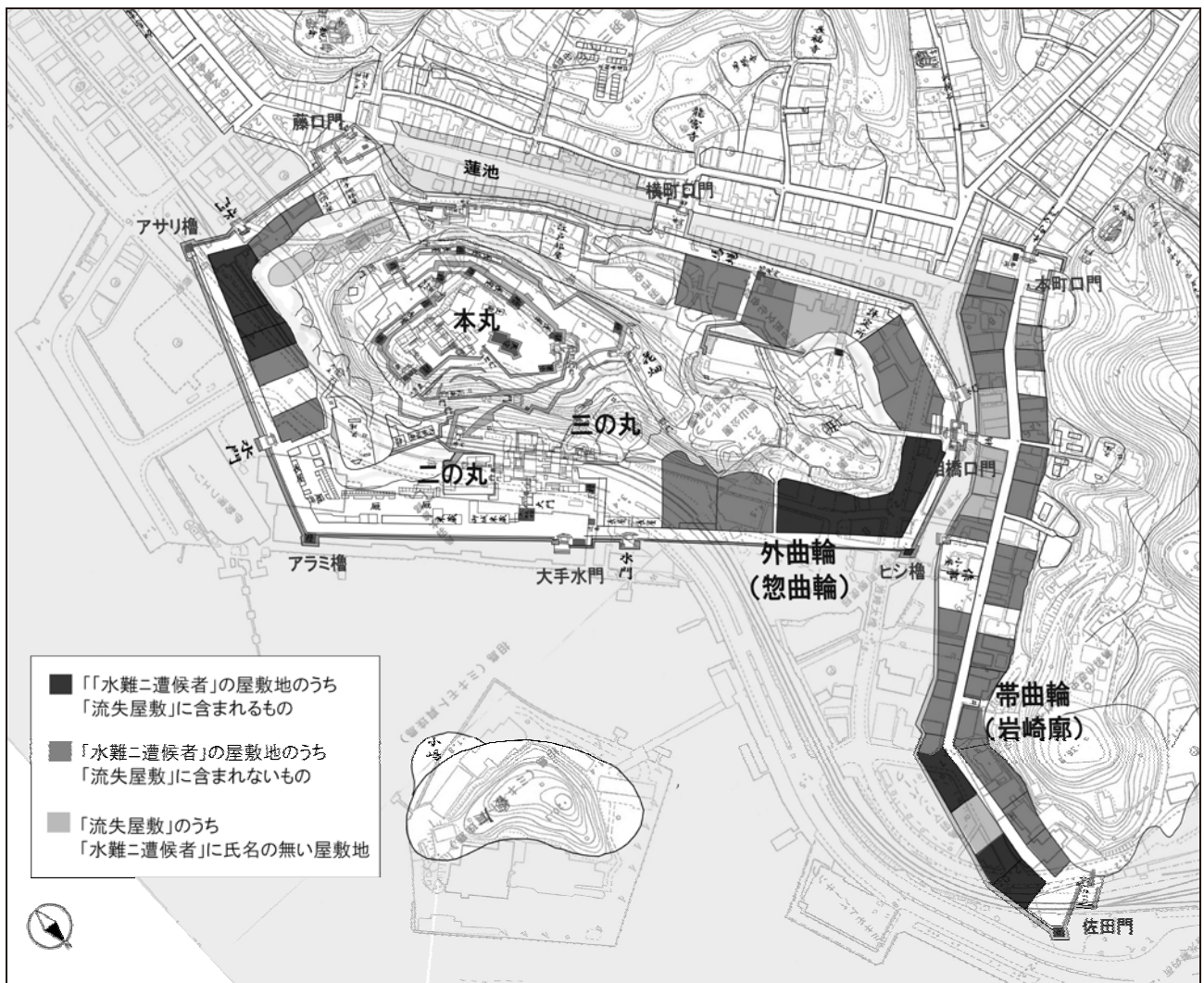


図9 津波被害を受けた鳥羽城内侍屋敷の位置。

(図7に「水難二遭侯者」の屋敷および「流失屋敷」の場所を加筆。)

Fig. 9 Locations of samurai residences in Toba Castle that were damaged by the tsunami.

The locations of the houses of “those who suffered from flood disaster” and “houses that were washed away” were added to Fig. 7.

### 6.2 城外侍屋敷

次に城外の侍屋敷について見てみたい。

鳥羽城では、城内の屋敷地の不足を補うため、城外の狭い谷筋に何箇所かの武家地を配している。そ

の中で最も広いものが城下南端に位置する奥谷で、城内の外曲輪や帯曲輪に屋敷を与えられた家臣に比べ小禄の家臣に与えられた屋敷地であった。

ここでは4名の「水難二遭侯者」の屋敷名を確認す

ることができる(図10). 奥に向かって傾斜し, 10m以上の比高差がある谷地に形成された武家地の中段に上段から「山川次部右衛門」, 「尾崎理左衛門」, 「相沢長左衛門」の3名と, 下段に「松平喜兵衛」の1名の4名である. 海拔は中段の武家地が約8m, 下段の海拔は3mで, 中段と下段だけみても比高差が5mもある. なお, 比較的小禄の家臣が多かったため屋敷替え等の異動が多かったためなのか, 『松平乗邑家中日記覚』に記される「水難ニ遭候者」と符合する屋敷地が4軒と少なく, しかも海に近く, 真っ先に津波の被害を受けるはずの下段の屋敷が1軒のみであったことから, この場所の被災を裏付けるには, 根拠が少ないが, 中段の3名の屋敷地が3軒連なるものであることが, 証明にはならないまでも, この場所が津波による被害を受けたであろうことを示唆する. なお, 奥谷地区に見られる屋敷名のうち, このほかにも, 『松平乗邑家中日記覚』に記された者と同姓で, 同一の家系であると推測されるものが数名あることを付記する. 今後の新たな史料の発見を期待したい.

また, 奥谷を下った先の, 御用船の舟蔵があった城下南端の藤之郷に唯一配せられた武家地に「水難

ニ遭候者」に符合する「栗生傳左衛門重常」の名前を見つけることができる. この人物は, 西尾市史資料叢書三(西尾市教育委員会, 2007b)所収の『西尾藩御役人両奉行系』によれば, 「唐津鳥羽御船奉行」の項に「150石 宝永二酉十月, 同四亥十月於鳥羽高潮之節流死」とあり, 宝永地震当時, 御船奉行を務めており, 宝永地震の津波により流死したことが分かる. 藤之郷の当該屋敷は, 御船奉行の職責に関わる御用船の舟蔵に近接するものであることから, 御舟奉行の役宅を兼ねたものであったことが推測される. 「栗生傳左衛門」がこの屋敷で津波に飲み込まれたのか避難の途上で巻き込まれたのか, はたまた別の場所での遭難であったかは定かでないが, 災害による武士の犠牲者の名前が知れることは, 大変珍しい. 『楽只堂年録』は宝永地震での武家の溺死人を14人, うち男7人とするが, この内の1名が「栗生傳左衛門」に比定できるであろう.

なお, 大給松平家の知行取の家臣について系譜をまとめた『当勤知行取出所略記』(西尾市岩瀬文庫蔵)によれば, 娘婿の「元義」が家督を継いで「傳左衛門」を襲名し, 家名が存続したことが分かる.



図10 城外の奥谷地区における「水難ニ遭候者」の屋敷地.  
(図8に「水難ニ遭候者」の屋敷の箇所及び屋敷名を加筆.)  
※網掛けは「水難ニ遭候者」の屋敷の箇所を示す.

Fig. 10 Houses of “those who suffered flood disasters” in the Okudani area outside the castle.  
The location and names of the residences of “those who suffered from the flood disaster” are added to Fig. 8.  
The shading indicates the location of the houses of “those who have suffered flood disaster”.

## §7. まとめ

以上、既知の史料に新たに発見された絵図の情報に加えて、宝永地震における志摩国鳥羽の津波浸水域について考察を加えた。その結果、城内の侍屋敷が残らず津波被害を受けたとする『松平乗呂家中日記覚』の「侍屋敷岩崎侍屋敷不残水破之事」との記述が事実と相違なかったであろうことを裏付けることができた。

また、城外の武家地について考察を加えたが、史料は津波が、鳥羽城か南端の奥谷では、海拔8 m付近まで津波が遡上した可能性があることを示唆する。隙間無く連なる武家地での津波被害としては、史料から推測される被災箇所が疎らであることに疑義はあるが、3段に分かれる当該武家地の中段で隣り合う3区画の敷地で津波被害を窺わせることから、少なくとも当該地までは津波が遡上し、被災したと推測する。このことから、宝永地震による津波が、安政東海地震の津波浸水高約5 mを超える地点まで遡上した可能性があることを指摘したい。

## 謝辞

査読者、編集出版委員の方々からは、大変有益なご指摘を頂戴し、本稿の改善を後押ししていただきました。また、本稿の執筆にあたっては、多くの方々、関係機関の皆さまにお世話になりました。中でも西尾市教育委員会の皆さまには、絵図の発見の報をいち早くお知らせいただき、史料の閲覧及び論考への使用について特別のご配慮と史料の解説に様々なご教示を賜りました。さらには、同僚諸氏も、執筆に悪戦苦闘する小職を温かく見守り、陰ながら応援してくれました。ここに記して感謝申し上げます。

対象地震: 1707年宝永地震

## 文献

- 東京大学地震研究所(編), 1983, 新収日本地震史料, 3別巻, 29-30.
- 盆野行輝, 2016, 宝永・安政地震の城郭被～志摩国鳥羽城を中心に～, 歴史地震, 31, 89-103.
- 羽鳥徳太郎, 1978, 三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 地震研究所彙報, 53, 1191-1225
- 行谷佑一・都司嘉宣, 2005, 宝永(1707)・安政東海(1854)地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布, 歴史地震, 20, 33-56.
- 三重県(編), 2003, 三重県史, 資料編近世, 2, 1020-1028.
- 児玉幸多監修・新田完三編, 1984, 内閣文庫蔵 諸侯年表.(株)東京堂出版, 630-634.
- 西尾市教育委員会(編), 2007a, 西尾市資料叢書三,

西尾藩御役人両奉行系, 55.

西尾市教育委員会(編), 2007b, 西尾市資料叢書三, 西尾藩御役人両奉行系, 52.

西尾市教育委員会(編), 2011a, 西尾市史資料叢書六, 大給松平家家譜下書, 8-15.

西尾市教育委員会(編), 2011b, 西尾市史資料叢書六, 西尾藩家老・今井家由緒書, 90-101.

## 史料

『松平乗呂家中日記覚』, 名古屋大学附属図書館蔵.

『鳥羽城之絵図』, 三重県総合博物館蔵.

『志州鳥羽城絵図』, 西尾市寄託, 個人蔵.

『当勤知行取出所略記』, 西尾市岩瀬文庫蔵.